青葉繁れる

井上ひさし

青葉繁れる

上ひさし

青葉繁れる

昭和四十八年八月十五日　第一刷
昭和四十九年七月　五日　第十二刷

著者　井上ひさし
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三
印刷　凸版印刷
製本　加藤製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Hisashi Inoue 1973　Printed in Japan

青葉繁れる

カット　村上　豊

装幀　粟屋　充

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

稔の家から学校まで、ゆっくり歩いても五分とはかからないのだが、彼はその通学路を、高足駄をごろごろ引き摺りながら、十分も十五分もかけてのんびりと歩くのが癖になっていた。

稔のこの癖は、いわば比例の法則の上に成り立っていた。彼の通学する県立の男子高校のある通りには、もうひとつ県立の女子高校があり、登校時になると青色の制服の女子高生で溢れ、城下町時代からあるその通りは地味な灰色のたたずまいから一気に陽気な青一色に変ってしまう、つまり、時間をかけて歩けばかけた分だけ、大勢の女子高生と行き交うことが出来、その分だけ余計に彼女たちの制服の埃っぽい匂いを嗅ぐことが出来るわけで、それが稔には無上の愉しみなのだった。

頭のよさそうな女の子と出っ会すと、稔はとっさに夢想した。

（たぶんああいう子は東大生なんかに弱いんだろうなぁ）

こう口の中で呟くのが、夢想の世界に没入するきっかけの呪文の文句で、呟くと同時に、稔の脳裏に銀杏の襟章を付けた一年後の自分の凛々しい東大生姿がたちまち浮び上る。稔の夢想の世界の時間割によれば、東大生になって始めての夏休み、帰省中の彼は、おそらく七夕祭でごった返す市内の目抜き通りの書店の店頭あたりで、その女子高生と邂逅することになるはずだった。彼女は傍に立ってぱらぱらと本の頁をめくる学生の白いワイシャツの胸に、燦として銀杏のバッジの輝くのを見て、まあ、と声にならない声をあげるに違いない。

（なんてすてきな銀杏のバッジ！　でも、この東大生とどこかで前に逢ったことがあるわ。どこで逢ったのかしら？）

稔はまさにこのときに彼女に声をかけるはずである。

「きみは二女高に通っていませんでしたか。ぼくはお隣りの一高生でした。通学の途中でよくお逢いしましたね？」

夏休みまでの三カ月間の東京生活で、そのときの稔は、洗練された物腰と歯切れのよい標準語をものにしているはずだ。それになにより凄い銀杏の魅力、彼女は「ちょっと歩きませんか」という彼の誘いを光栄とさえ思い、ふたつ返事で後に蹤いてくることだろう。散歩の場所はどこがいいだろうか。稔は広瀬川畔から青葉城趾にかけていくつかの草叢があったことを思いつく。女の子との散策は青葉城趾へ向うがよい。彼は歩きながら彼女に、階段教室で講義をする教授たちの小さな愛すべき癖や、東大の学生寮のお話にならない乱雑さや、知的な刺激と冒険に充ちた寮

の東大生たちとの交際について語ることになるはずだ。城の趾に二人が立つころ、すでに陽は西風(ならい)蕃山の向うに落ちて、涼やかな夏の夕風が周囲の高木の葉をさやさやと鳴らしはじめることだろう。行動を起すのはそのときだ。あくまで優しく、しかし寸秒のためらいもなく、彼女を草叢に押し倒し、細い腰からスカートを毟(むし)り奪(と)るだろう。

彼女は抵抗するだろうか。おそらくすることはするだろう、だが、その抵抗はすぐ鎮まるはずだ。秀才好きの女の子は揉み合ううちに、銀杏のバッジでブラウスの上から乳房の上を押され擦(こす)られ、ついには切なそうに息をつき、やがて稔にしがみついてくるはずだ……。

ここで稔は横を通り抜けようとしていた頭のよさそうな女子高生、つまり自分の夢想の中の恋人に思わずにやりと笑いかけた。女子高生は眼にはっきりと敵意をあらわして稔を睨みつけながら通り過ぎて行ってしまった。

無論どんなに冷(ひや)やかで厳しい拒絶が撥ね返って来ても、未来妄想劇の相手役は後から後から陸続とやってくるのだから、稔はいささかもこたえない。相変らず足駄をがらごろ鳴らしながら、自分の前に現われては左右に分れて通り過ぎて行く女子高生ひとりひとりの、髪の毛の長短、顔立ちの良否、胸の脹らみのあるなし、腰やふくら脛(はぎ)の太(ふと)ぼそ、スカートの襞(ひだ)の手入れの良し悪し、靴先の光り具合の塩梅加減などを、鋭い目付きで素早く点検して行く。

(おっ、あの子はどうやら慶応に弱い型……)

色白の細面(ほそおもて)で、鼻先がつんと上向きの女子高生のやってくるのを見て、稔は頷いた。

二年前、つまり高校一年の春、一週間に十三回も観た『若草物語』のエリザベス・テイラーと似ている、と無理に思い込めば、そう思えないこともないような感じの女の子だった。その映画の中のリズ・テイラーは、鼻を高くしたい一心で、眠っている間はずっと洗濯挟みで鼻先を挿みつけていた。そのころ、稔は学級で一番背が低く、受験雑誌の「螢雪時代」の広告ページで見て取り寄せた「大映スターズの長身大投手スタルヒン選手も推奨する速効式背伸ばし器」というやつを、毎夜、自分の躰に付けて眠ることにしていたので、同病相憐れむというのか、リズ・テイラーの苦心がとても他人事とは思われず、その場面にひどく心を動かされ、つまりは十三回という記録になったのだった。

その背伸ばし器の構造はごく簡単で、ズック布で作ったベルトが二本、それで総てだった。だから、送られてきた小包を開いたとき、稔は思わず「ああやぁ、おらやぁ、インチキに引っかかっちまったわぁ」と叫んだほどだった。同封されていたガリ版刷りの使用説明書には稔の疑いを前もって見越していたらしくこう書いてあった。

「偉大な発明ほどその原理は簡単なものであります。このことを疑う人は、蒸気機関の原理が沸騰する薬罐にあり、航空機の原理が空飛ぶ鳥の翼にあり、パチンコの原理が引力の法則の上に成り立っていることに思いを馳せるべきであります」

パチンコが偉大な発明かどうか、また、パチンコに引力の法則が関係しているのかいないのか、この二点については大いに議論の余地がある、と稔は訝ったが、容易に結論が出そうになかった

ので、その先へ読み進んだ。

「……さて、使用法ですが、この背伸ばし器を使う場合は、二本の柱の間に布団を敷いてください。就寝に際しては、まずベルトⒶの一端を柱に固定し、他の一端を、揃えて伸ばした両足にしっかりと結びつけます。次に頭の方にある柱にベルトⒷを引っかけ、あとはズボンのベルトを締める要領で、顎の下で固定します。つまり、足と顎を上と下から引っ張るのが、この背伸ばし器の原理なのです」

これでは背が伸びる前にまず首が伸びてしまうのではないかという疑念がそれこそ首を伸ばしかけたが、稔は懸命になってその疑念を押えつけた。背伸ばし器に彼は一カ月分の全小遣いを投じていた。器械の欠点を余りあばき立てては小遣いなしで耐え抜いたあのひと月の辛苦が無駄になってしまうだろう。稔はそれを怖れたのだ。使用説明書はこう結んであった。

「なお、本器を三カ月間連続的に使用しても効果のあらわれない場合は、弊社が新たに発売した『強力本格式背伸ばし器』を、お試しください」

その夜から稔は両足と顎をベルトで柱に固定して眠った。これは相当な難行苦行で、なによりもまず寝返りが打てないのに参った。またしばしばベルトが顎から首に喰い込み、そのたびにスタルヒン投手に首を締められる夢を見て魘(うな)された。悪いことにそのころ近所に小火(ぼや)騒ぎがあり、『火事だ！』という叫び声や半鐘の音に慌てて飛び起きたが、そのときはいやというほど顎を引っ張られてしまった。数日間、首の付根が痛み、首が回らなかったものである。

だが、一年の二学期からぐんぐん身長が伸び出したから不思議だ。稔には背の伸びた原因が自然の発育によるものなのか、それともやはり背伸ばし器のお蔭なのか、いまだに見当がつきかねている。

リズ・テイラーと似ていないこともない女子高生がやって来たというところから、話が逸れてしまったが、稔はそういう洒落た感じの女の子は皆、慶応の学生に弱いと決め込んでしまっているので、早速、一年後の自分が、ぶっちがえた二本のペン先の徽章をシャツの胸に付けて、小判饅頭のような学帽をかぶっている姿を思い浮べた。自分はこの女の子とどんな切っ掛けで知り合うことになるのだろう。いや、こっちから切っ掛けなど作らなくても大丈夫さ、と稔は思った。慶大生に弱い女の子というものはおしなべてお転婆で気さくな性質なのだ、ぶっちがえた二本のペン先の徽章を見て、向うから話しかけてくるにちがいない。そうしたらまた青葉城趾へ誘うことにしよう。そのときの話題はやはり同級生のことがいいだろう。隣りの席に坐っているやつが財界の大立者の二代目で、真後の席が大会社の社長の御曹子で、斜め後がさる小説家の息子だなんて話をしてやろう。早慶戦の話なども彼女に喜ばれるかもしれない。トップの二塁手宇田川からラストの投手河合までの全選手が塾生の応援にふるい立ち、早稲田の主戦投手福島に襲いかかって長短打のつるべ打ち、更に救援の石井投手をも打ちくだく。守備につけば慶応内野陣に美技相次ぎ、河合投手も要所を締めて宿敵を零封、神宮の森に応援塾生の歌う「陸の王者」が響きわたる、と話してやれば彼女は手を打ってうれしがるだろう。そして、そのときだ、彼女を青葉城

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

趾の草叢に押し倒すのは。
ここで稔は、待てよ、と夢想を一時打ち切った。さっきの頭のよさそうな女の子も草叢、今度も草叢、これではあんまり能がなさすぎると彼は反省したのだった。
慶応に弱そうな感じの女の子を目で追いながら、稔は大いそぎで彼女を押し倒すにふさわしい場所を他に探しはじめたが、適当な場所を思いつかぬうちに、その女の子は彼の前をさっさと通り過ぎて行ってしまった。
(惜しいところだったな。もうちょっとであの子を組み敷くことが出来たのに……)
呟きながら前方に目を戻した稔は、自分の方へ急ぎ足で近づいてくる新手(あらて)の女子高生を見て、思わずはっとなった。
低いが左右にしっかりと鼻翼(こばな)の張った頑丈そうな鼻、ふくらし粉で脹らませたような頬、太い眉、大きくて優しそうな眼、横一文字の薄い上唇と垂れさがった部厚い下唇、肥えた胴体をがっしりと支える太い足、とりわけ目立つ胸部の隆起。おそらく汽車通学をしている郡部の富農の娘だろうが、稔がその前の日に大映の封切館で観た、春らんまん人情明朗歌謡巨篇『娘(むすめ)初恋ヤットン節』の久保幸江と生き写しだった。
(農大生にぴったりのタイプだな)
途端に稔は北海道の原野を久保幸江と似ているその女の子と手をつなぎながら歩いている自分を想像した。一年後の彼は、なぜだか帯広畜産大学酪農科の一年生になっているのだった。そし

て、すでに彼はその女の子の許婚者のようなものになっていて、東北から津軽海峡を渡ってはるばる帯広まで逢いにやってきた娘と郊外に散歩に出ているところなのだった。そのとき、稔は「これからの農業には酪農のよいところを加味しなくてはだめだ」などと鹿爪らしく言い、「父も稔さんと同じことを言ってました。むろんわたしもそれに賛成よ」と彼女は答える。それを機に、自分は草の上に彼女を押し倒してしまうはずだ、と稔は空想を進めた。娘はありったけの力で稔から逃れようとするだろう。たとえ許婚者の間柄であっても、彼女は生娘だから本能的に拒絶の態度をとるに違いない。だが、そのときは「両方の親が承知しているんだからいいだろう」と言い張って、彼女のスカートから決して手を離してはならないだろう。そして、優しく、かつ猛々しく彼女の上にのしかかるのだ。つまり、それが男の仕事なのだ。空想の中の自分のてきぱきした女の扱い方に稔が感心し、うっとりしていると、どこかで、「なにをぼやっとしてる？どこか塩梅悪いのかね？」

という声がした。

たしかここは北海道の原野、近くに人影はなかったはず。そう思いながら稔は掌で目を擦った。するとそこは北海道ではなく自分の学校の通用門、通称「裏門」の前、もう彼は帯広畜産大学酪農科の一年生などではなくただの高校三年生、そして、たったいままで自分と揉み合っていたはずのあの初恋ヤットン娘は、いかった後肩を左右に振りながら、すでに稔の数十米先を去って行くところだった。どうやら稔は裏門の十数米手前で彼女をひと目で恋し、裏門の前までゆっくり

歩きながら魂を北海道の原野に飛ばし、そこですれ違った後も彼女の後姿にうっとり目を向けながら、なおもあらぬ空想の続きを見ていたらしい。

このように稔は行き交う女子高生と、毎朝、何度もひとり勝手な想像恋愛に陥る癖があった。実際には女の肌どころかスカートにさえも触ったことがないので、男と女がそのとき具体的にどこをどうしてどのような動きをするのか分らず、したがってイメージのしようもなく、いつもスカートに手をかけるところで彼の夢想は終ってしまうのだが、五分で着ける学校へ十分も十五分もかかるのはこの癖のせいなのである……

「田島稔くん、しっかりしてけさい。今日は一学期の最初の日ではねすか？」

さっきの声の主が稔の肩を叩きながら、背後から彼の顔を覗き込んだ。声の主は全校生徒から裏門校長という渾名を奉られている小使である。彼は明治の末つ方からこの学校に奉職しているという小柄な老人で、乃木将軍まがいの胡麻塩の顎鬚が自慢の種だ。

稔たちが入学した昭和二十五年の春、ちょうどこの老人は満六十歳、県教職員規程によれば停年退職のはずだったのに、彼自身の強い要請と、それを伝え聞いた同窓生総会の満場一致の議決によって、そのまま居坐り、自分の聖域である裏門を守り続けている。この裏門校長の俸給は、県に代って同窓会が捻り出しているようだ。

「塩梅悪いなら、真っ直ぐ衛生室さ行った方がよかっぺ」

裏門校長は心配そうに稔の額に右手を伸ばした。

「熱でもあるんでねぇの？」
「熱などねぇす」
稔は裏門校長の手を軽く押し返した。その拍子に裏門校長が長い紐で首に懸け胸の上に垂した鉄道時計が、背広のボタンに触れてかちゃかちゃと鳴った。
稔たちは入学以来二年間、毎日のようにお目に掛っているからべつに驚きはしないが、初めて裏門校長を見る人は、その物々しい扮装（いでたち）におそらく目を瞠るはずだ。裏門校長はあちこちに継布（つぎ）を当てたつんつるてんの背広を着ている。これは本物の校長チョロ松が着古したもののお下（さが）りだ。チョロ松というのはむろん生徒たちがひそかに贈った渾名で、松田なにがしという本名は歴（れっき）としてある。ただ、ひどく小柄でちょろちょろ忙しく動き廻るうえ、鼻下にちょろっと貧弱な髭などを蓄えているので、チョロ松という、校長としては少々威厳に欠ける渾名を付けられてしまったのだ。ついでに、教頭の渾名は抜け松という。本名は松下で、教頭としての役目を果すかたわら西洋史も教えているのだが、稔たちの先輩に「三十年戦争は何年続いたか？」という間抜けた試験問題を出し、それ以来、間抜け松、略して、抜け松と呼ばれている。もっともこの「三十年戦争は何年続いたか」という問題に正解を与えた生徒はごく僅かしか居なかったそうで、この渾名の由来を聞いたとき、稔たちは（抜け松も間抜けだけど、先輩の方はそれに輪をかけしんにゅうをかけた大間抜けぞろいだっぺ）と、先輩たちの方をより軽蔑したものだ。
ところで、裏門校長の扮装だが、彼はチョロ松のお下りの背広の上に、前にも書いたようにま

ず鉄道時計を掛け、更にその上から国防色の雑嚢と大型の懐中電灯を斜め十文字に吊している。いつだったか、授業が急に休講になり空いた時間をもてあましていたとき、誰かの発案で、裏門校長の雑嚢の中身を拝ませてもらおうということになり、彼の常駐している、裏門を入ってすぐの裏庭にある四阿まで、稔の学級の生徒全員が出かけて行ったことがある。はじめのうち見せ渋っていた裏門校長も、稔たちがあまり熱心に頼んだものだから、おしまいには根負けしたと見え、雑嚢の中身を四阿の床の上に並べ出した。

最初に取り出したのは学校の同窓生名簿と在校生名簿だった。なるほど二冊とも裏門校長としては必携の資料だろう。次に褌と襦袢。彼は月曜から土曜まで学校に泊り込んでいたが、これはそのための着替えなのだろう。それから真中からふたつに切った新生が十数本、これは学校の名入りの封筒に入っていた。紙巻煙草をふたつに切って喫うのは、言うまでもなく倹約が目的で、彼は稔たちに「乃木将軍閣下がそうしておられたから、わしもそうしておるんでがすべ」と説明してくれた。ほかに、乃木大将と静子夫人が並んで写っている絵葉書が一枚。絵葉書は手垢で黝ずみ、変な光沢を放っていた。角が四個所ともまるくなっていたが、これは裏門校長が一日に何度も雑嚢から取り出しては眺め、眺めては仕舞い込む、それを繰返しているうちに摺り切れてしまったのにちがいない。

裏門校長はほかにもいろんな小物を出して見せてくれたが、たいてい忘れてしまった。ただ、ひとつだけ稔が未だにはっきりと憶えているのは、裏門校長が最後にかすかにためらいながら取

り出した薄汚れた白封筒で、中には誰かの髪の毛が二十本ほど入っていた。
「何処の女子の形見の髪の毛すか？」
誰かがからかって言うと、裏門校長は入学以来始めて見るような屹とした顔付になり、
「支那事変と大東亜戦争で倅が二人戦死したんでがす。こいつは二人の倅の形見でがす」
と強い口調で言い、すぐさまその白封筒を雑嚢の中に戻してしまった。
戦争中、稔たちは国民学校の生徒だったが、三月十日の陸軍記念日になると毎年のように、校長は乃木大将率いる第三軍の旅順攻撃の話をした。熱狂的な乃木信者の国民学校校長は、毎年きまって次のように話を結んだ。
「……勝典、保典の二人の子どもを旅順攻撃戦で戦死させながら、悲しみの色ひとつ顔に出さなかった乃木将軍こそ、陸軍軍人の鑑ではないでしょうか。明治三十八年三月十日、日本陸軍が奉天を占領したのを称えて陸軍記念日と定められているようですが、私はむしろ乃木将軍が二〇三高地を陥落させた十二月五日のほうが、陸軍記念日によりふさわしかろうと信じております」
裏門校長の雑嚢の中の汚れた白封筒を見たとき、稔の記憶に不意にこの話が蘇ってきた。裏門校長が、敗戦このかた威光地に堕ちっ放しの乃木大将に肩入れしているのは、軍神として崇拝しているためではなく、戦さで二人の息子を失った父親としてその悲しみを理解しているからではないのだろうかと、そのときの稔は考えたものである。
裏門校長は、鉄道時計、雑嚢、そして懐中電灯のほかにもうひとつ、腰に太い樫の棒をぶら下

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.